

『和訓栞』 原本の復元 (一)

—見出し項目について—

整版本『和訓栞』が刊行を前に内容の節略を余儀なくされてきたことはあまり知られていない。唯一つそれを伝える谷川士清宛本居宣長書簡(安永二年二月五日付)にしても節略の事実を記すのみで、数にしてどれだけの節略がどのようになされてきたかはこれまで、皆目知る由もなかったのである。

栞ノ義、節略被_レ成候而板行之よし、是ハ甚不_レ宜義と奉_レ存候、右ノ書ハ、随分事広ク不_レ洩様ニ有度御書ニ御座候へハ、略仕候而ハ本意なき義に奉_レ存候、惣体近来書林、とかく利分ノ事而已ニカ、ハリ候ニ付て、作者ノ本意ヲ失申候事多く、扱扱歎かはしき事ニ御座候、書物ハ後々ニのこり候物ニ御座候へハ、大切ニ御座候、ヤム事エズハ、段々ニ御分チ被_レ成候而なり共、節略ハ御無用ニ奉_レ存候

(『本居宣長全集』第十七卷。筑摩書房)

三 澤 薫 生

しかるに先年、稿者は偶然にもその節略のない『和訓栞』を披見する機会に恵まれた。石水博物館に蔵せられる稿本二本のうち、谷川士清曾孫に当たたる谷川清逸すがはやの識語を持つ四十冊である(以下、これを清逸本と略称する。また識語中の句読点は私による)。

倭訓栞ハ曾祖父士清大人撰出られて通計四十卷、川北景禎ぬしの筆なり。そか中に士清大人を初、其子士逸大人、大人のみこかね荒木田尚賢など継々考出られしを書加へられし書なり。されといかに鴨せん、新玉の年経るなへに虫はミ朽そこなへらんか口をしとて、いとまの間ある毎につか短き筆を執て書改しは天保十年己亥弥生の末になむ有ける。

曾孫清逸謹識

もちろん、斯かる稿本がこれまでまったく報告されなかったわけではない。東京都立中央図書館に蔵せられる一本はこれに

類するものであり、稿者もそうした一本を蔵している。ただ両書何れも後半の一部分に過ぎず、清逸本のごとく全巻揃いのものとなると他にあるを聞かないのである。

本書存在の意義はこれだけでも十分承知されようが、更に言えば書写年時(川北景禎本)が稿者のみるところ、整版本刊行時(第一回の刊行は安永六年九月)に近いことが注目に値する。左はそうした徴証の一二である(詳細は別稿にて発表の予定)。

(1) 先ず清逸本と景禎本との関係であるが、前者「にしのかり」項に不明の文字であることを示す符号として四角(□)が用いられている(吉野先主)の「先主」に当てた二個の四角。これを景禎本の虫損とみるならば、清逸本はその忠実な写しということになる。清逸本をもって景禎本と見做すことは十分可能である。但し、清逸本に追記がまったく見られないわけではない。

(2) 『和訓栞』には土清見聞の記事が年号を冠して記載されているが、清逸本においては「ねずみ」項の「安永丙申(五年)の夏」までが確認できる。これは整版本の場合と同じである。ちなみに谷川土清は同年十月十日に没している。

(3) 右に関し、「はぎ」項は「安永丙申(五年)の春」を記すが、その中に整版本から除かれた記事、傍線部を見ることが出来る。

下野国足利郡和泉村八幡山より村正真秀氏か伐取しはりの木の内に大神宮の三字見ゆめり 安永丙申の春内宮車館に来る 正しく天造の物なりし 奇瑞目を驚しぬ 予か参宮の前日に来るといふ 小野の榛原に皇祖天神を祀る事神武紀に見ゆ(下略)

士清が自称の語として「予」を使用することは、例えば

いか ……○烏賊をいふハ形もいかめしく骨もことやう

なれハ名つくる成べし(中略)又予か族家に井中

より五嶋いかの子を出す 其地海に遠し(前編)

あと ……○予か近隣の一卒婦を迎へて後赤そぶ水の井

いつとなく浄水となれり(後略) (前編)

などからも拾い出せる。景禎本が安永五年春以降に書写されたことが明らかになるが、これをもって前項(2)と併せ考えるならば、景禎本の書写年時は更に絞られることになる。

即ち本稿は『和訓栞』原本の復元を試みるべく、以上の清逸本をもとに節略されたすべての内容をここに明らかにしようとするものである。まず手始めに見出し項目を取り上げることしたが、掲載の順序はすべて清逸本のままとした。

なお内容の理解を図る意味から各項できるだけ注を付すことに努めたが、不明に終わったものもある。今後の調査によりこれら項目が順次解明されることを願う次第である。

【大綱部】—省略。

【阿の部】—十五例

① あかはだか

日本紀に裸をよめり 赤膚の義也 書言故事に空尽无物曰
赤と見えたり ○劍工を裸伴といふハ鍛人の体也 裸伴此云
阿箇播娜我等母とありて雄略紀にも禿鷄をあかはだなるかけ
と見ゆ ○大和添下郡に赤膚山あり 新統古今集に

衣たにふたつありせハ赤膚の山にひとつハかさまし物を

—『日本書紀』卷六「垂仁紀」三十九年十月「裸伴」の注に「裸伴、

此をば阿箇播娜我等母と云ふ。」(大系本上・二七六頁)、同書卷十四

「雄略紀」(七年八月)に「禿(右訓ツフレナル・左訓アカハタナル)鷄

ノ勝ヲ見テ」(寛文九年本)とある。なお大系本は「禿」に「つぶれ」

の訓を付すのみ(上・四七四頁)。以下、両者に相違ある場合はその

別を記す。

② あかえほし

世諺にすきに赤烏帽子といふことは義教將軍の時御すきやご
とに松浦肥前守赤ぬりの烏帽子を着して参りしかハ將軍ミつ
から其貌を凶して賜ひけるよりいひ出たるなりと一書に見え
たり

—『塩尻拾遺』卷五に「○義教將軍の時、松浦肥前守源の義、御教寄こ

とに赤ぬりの烏帽子を着して参りしかば、將軍其貌を自凶して賜ひ

し。義、薙染の後、彼の像を南禅寺に納めしとかや。当時の諺に、

スキニ赤エボシといひけるは、此肥前守が故事也とぞ。」(日本随筆大

成)とある。

③ あくせき

俗語也 あくせきとして居なといふ也 砧々を訳せり

④ あさで

麻手の義 麻の葉の人の手に似たれバいふ也といへり 万葉
集に庭にたつ麻手かりほし麻手小衾あさでつくらひ 曾丹集
に庭に生る麻でか花などよめり

—清逸本「あさでつくらひ」を大系本・全集本とも「麻紵(あさでづ

くり)を」(大系本。両本3791番歌)に読むが、土清使用の寛永版

は西本願寺本と同じ「アサテツクラヒ」(朝手作尾)の訓を付す。

また『曾丹集』の「庭に生る浅茅が花をはやしけむ昔の人ぞみね

ど恋しき」(五月はて)は本書「麻でか花」と異なるが、これも『夫木

和歌抄』に「庭におふるあさでがはなをはやしけんむかしの人ぞみ

ねど恋しき」(新編第2巻・3292番歌)とある。何れもテキスト

差に拠るものである。

⑤ あさぶづ

催馬楽に見ゆ 浅水の義也 摂津国にあり あさむつも同じ

○あさんづの橋ハ越前にあり

—「催馬楽」「朝津」の「朝津の橋の(安左牟川乃波之乃)」とどろとどろと降りし雨の古りにし我を誰ぞこの仲人たてて御許の容貌 消息し 訪ひに来るや さきむだちや(大系本三九〇頁)を指すか。

⑥ あしぶち

倭名鈔に贈をよめり 四散皆白と見えたり 神楽歌にもあしぶちのこまとよめり 踏雪馬も同じ

—「神楽歌」「其駒」に「葦駁の(安志布知乃)や 森の 森の下なる 若駒率て来 葦毛駁の 虎毛の駒」(大系本三五一頁)とある。

⑦ あぜたけ

升を分る棧具也 東国にあや竹と云竹もてする物也

—「物類称呼」「あぜ竹」の条に「升をわくる竹なり(割注)○関西にてあぜたけと云を東国にてあやたけと云(巻4・3オ)とある。

⑧ あてび

源氏に見ゆ 貴ぶるの義成へし

—「あてび」は「あてぶ」(上二段動詞)の連用形。「源氏物語」東屋に「若き君達とて、すぎすぎしく貴びても、おはしまさず(大系本五・一四〇頁)とある。なお、見出し「あてび」の横に朱線が施されてゐる。

⑨ あねごどり

鳴女をいふ 北伊勢の方言也

⑩ あはや

鳴伝足速乃小舟風守と見えたり

—『万葉集』に「鳥伝ふ足速の小舟風守り年はや経なむ逢ふとはなしに(巻7・大系本1400番歌)とある。「あはや」は速度の速いこと。「あしはや(をぶね)」とも。

⑪ あひて

東鑑に合手と書り

—例えば「東鑑」建久元年七月二十日の条に「菅中有(双六御会)。佐々木三郎盛綱候(御合手)。(寛永三年本)とある。

⑫ あまあかな

倭名鈔に苳胡をよめり 甘赤菜の義なるへし 野芹とも訓せり 今鎌倉を賞す 葉細し 韭葉の柴胡ともいふ 本草に竹

葉柴胡といふ 一種大葉のものあり 一種すゞ柴胡あり 徐長卿也

—「東雅」「芹」の条、割注に「……苳胡をアマアカナといひしはアマとは其味をいひアカナとは其淡赤色なるが故也(下略)(巻13・穀蔬第13)とある。

⑬ あんす

琉球国にてハ従一品の按司の音也

⑭ あらきハリ

菑をよめり 新墾の義也 日本紀にはにひハリとよめり

きハリハ切治の義 土を新たに切おこすをいふ也

—『日本書紀』卷十五「顕宗即位前紀」に「出雲は 新墾、新墾の
十握稻を、浅甕に 醸める酒、美にを 飲喫ふるかわ。」(大系本上・
五二二頁)とある。

なお『東雅』「曠」(ハタケ)の条、割注に「また菑の字読てアラキ
ハルといふも云々」(卷2・地輿第2)、『書言字考節用集』に「新墾(ア
ラキバリ)」(乾坤下・二)とある。

⑮ あらハしころも

源氏に見えたり

—『源氏物語』の用例は藤袴巻に見える。

【伊の部】—九例

① いさがわ

率川也 率川ハ春日山紀伊社より率川の社前を過る也 式

率川坐大神御子神社三座 白川殿百首に

祝子ハはや祭らんといさ川の神の宮居にぬさ手向也

—『白川殿七百首』に「はふりこははやまつらんといざかはの神の宮
居にぬさ手向くなり」(新編第10巻・551番歌)とある。『百首部類』

〈元禄十三年刊〉に所収。清逸本が「百首」とするはこの故か。

② いそな

磯菜也 童蒙抄に磯菜取をいさなとりとあり

—『和歌童蒙抄』第七に「とこしへにきみもあへやもいさなとりうみ

のはまものよるときくを 衣通姫歌也。(中略) いさなとりとは、

いそなとると云也。さとそとは同意なり。」(『日本歌学大系 別巻一』
二五八頁)とある。

③ いそざき

石磯の前崎とよミたれハいつくにもいふ詞なるへし 名所に
あらず

④ いとぞこ

最低の義成へし 椀などにいへり

—『書言字考節用集』に「居底(キトゾコ) 椀蓋ニ所言(器財・七)と
あり、『和訓栞』前編「いと」の項に「辞にいふハ日本紀に最字云々」
(卷3・21ウ)とある。

⑤ いにしとし

往年の義也

—見出し「いにしとし」とともに全文を朱筆にて抹消する。

⑥ いはた

万葉集に山科の石田の森と見ゆ 新古今集には山城の石田の
小野と改らる

—『万葉集』「山科やましなの石田いはたの小野はほきはらの柞原はまはら見つか君やまがが山道やまぢ越ゆるむ」(卷
9・大系本1730番歌)に対する『新古今和歌集』「山しろのいは
たのをののは、そはらみつ、や君が山ぢこゆるん」(卷17・大系本
1587番歌)の關係を記したものを。右万葉歌に続いて「山科の石田

の杜に布麻置かばけだし吾妹に直に逢はむかも」歌(寛永版第三句は「布麻越者」(フミコエハ)が見えるが、これを錯誤したか、清逸本は「石田の小野」を「石田の森」にする。

⑦ いはゆる

所謂をよめり 義文字の如し いひよする也 よす反ゆ也

⑧ いくの

源氏に見ゆ 嘉暦公卿勅使記 東鑑に家ノ子と書せり 史記にいふ家人子の称の如し 輟耕録に家生児と見え漢書師古か註に奴産子猶今人云家生奴也

— 『源氏物語』の用例は紅葉賀・絵合巻等に見える。

⑨ いらもみ

源氏にひねもすにいらもみつる風のさわぎと見えたり

— 『源氏物語』の引用は明石巻。但し、大系本「風」に対し、全集本は「雷」とある。

【字の部】— 十五例

① うくひすのきの

倭名鈔に鸚実と見えたり 台記に天養二年五月三日権大納言宗輔送嬰実云自和泉国所尋取之 其色紅大如碁石 其体円其核微小有三種 食之甚美其味堪賞翫と見えたり 今うくひすといふ樹ハ吉利子樹也 其実食ふへし 一説に桜桃実也 桜桃を鸚桃ともいふハ其实鶯鳥の所合なる

か故也 今見えぬといへり 京にうすの木 伊勢にこしき 伊賀にこしきぐみ 津輕にしだみといふ

— 『大和本草』「吉利子樹」(ウクヒス・ウスノキ)の条に「源順和名抄十七鸚実 和名宇久比須乃岐乃美 又左府頼長之台記ニモ鸚実ノ事アリ…京畿ニテ白ノ木ト云 其実ノ形 白ノ如ク上クボメリ 山中処々ニアリ 伊賀ニテハコシキグミト云 グミノ類ニハアラス(下略)」(卷10・28オウウ)、『物類称呼』「吉利子樹」の条に「うぐひすのき〇江戸にてうぐひすと云 京にてうすの木と云 伊賀にてこしきぐみと云 奥ノ津輕にてしだみといふ」(卷3・18オ)とある。

② うけたまはる

承をよめり 給はるをそへていふハ承て心得るの意也 古語にうけたうバリともいへり 又うけばると物語に見えたるも 同し 承諾の義也 庭訓の一本に事奉をよめり

— 新日本古典文学大系所収の『庭訓往来』に「聊可有用意之由事承候」(二月二十三日状 返信)、「為稽古巨細奉度候」(十二月三日状 往信)とあり、後者訓読文「奉」に「うけたまは」の訓が付されている(『易林本節用集』「奉 ウケタマハル」。清逸本の「庭訓の一本に事奉をよめり」では誤解を招く虞がある。

③ うしむし

牛虫の義 砂接子也といへり 形天牛に似て翼なく倒に行てあとに退き好んでねふる 両箇出れハよく戦ふといへり

—『大和本草』「砂接子」(ウシムシ)の条に「…形天牛ニ似テ翼ナシ
倒ニ行テアトニ退ク 好ンテネムル 不_レ飛灰黒色 首ニ兩角アリ
仏堂神殿大木ノ下ナトニ生ス 穴ヲホリテ居ル 其ウゴモテル土周
リ高ク其穴アル処 凹ナリ 両箇出レハ能ク、カフ 小兒以テ戯ト
ス」(卷14・26オ)とある。

④ うそやき

おときほうこに鼻のさきうそやきたるありさまと見えたり

—『伽婢子』卷十三「天狗塔中に棲」に「此法師、「あなにくや。あな
見られずや。なにのこともなき奴原のひげくひそらし、我はがほな
る風流づくし、鼻のさきうそやきたるありさまかな」とひとりごと
して」(新大系本三七二頁)とある。この場合の「うそやぐ」は得意然
として鼻がびくびく動くさまを言うのであろう。

⑤ うたづがたし

不審をよむの事 野守鏡に見えたり 和泉式部か歌とて

朝またきおきてそ見つる梅の花夜の間の風のうたづかたさ
に

されと此歌ハ元良親王の歌にて拾遺集に入れり 尾の句うし
るめたさにと見えたり

—『野守鏡』上「詞をはなれて詞をはなれざる事」にある藤原保昌の
「早朝におきてぞみつる梅花を夜陰大風不審く」に「歌に対する右、
和泉式部歌を記したもの。但し群書類従本・歌学大系本とも結句は

「うしろめたさに」となっている。或いは元禄三年刊の絵入本に「う
たづかたさに」とあるか。未見である。

なお『拾遺和歌集』は「兵部卿元良親王」として「朝まだき起き
てぞ見つる梅 花夜の間の風のうしろめたさに」(卷1・新体系本29
番歌)とある。

⑥ うぢまる

うなきの事をいふよし大諸礼に見えたり 宇治川より出たる
詞成へし 江戸に浅草深川の産を江戸前と呼 他所を旅うな
ぎと呼か如し

—『大諸礼集』卷十二「万秘伝」に「一うぢまるとハうなきの事」(7
ウ)とある。

また「物類称呼」「鰻鱺」の条に「うなき○山城国宇治にて○うぢま
ると云。…江戸にてハ浅草川深川辺の産を江戸前とよびて賞す。

他所より出すを旅うなきと云。」(卷2・16ウ)とある。

⑦ うづく

腫物などのつよく痛をいふ 髻ノ字の意也といへり

—『書言字考節用集』に「髻(ウヅク)音ハ興(肢体・五)とある。

⑧ うつせみ

空蟬と書り 蟬脱をいふ 菅家万葉に蛻蟬とも見ゆ うつせ
ミハからをみつ、もなくさめつといへる是也 ○ぬけがらな
らで鳴蟬をもうつせミとよめり 声にもぬけぬべき物なれば

也 ○うつせみの世といふ事万葉集に多し 莊子に螻蛄不

知「春秋」と見えて世のはかなきをたとふる也といへとまた人
とも命とも妹ともつゝけてよめり 是ハ顯身の義なるを文
字を借たる也 よてうつそみ又うつしミともよめり 古事記

に宇都志意美といへるハ顯大身の義にて神の現形したまふを
いへはさら也といへり 古今集の比よりそ蟬の事にのミいへ
るなるへし ○美蟬の義ともいへり 俊頼集に

をミなへしなまきたてる姿をやうつくしよしと蟬の鳴らん
○花肆にうつせみといふ草ハ朮の種也

—「昔家万葉」は『新撰万葉集』のこと。卷上「夏歌二十一首」に「蛻
蟬之佐敷物者夏草之露丹懸礼留身丹許首阿里芸礼(寛文七年本)とあ
る。

また「うつせみハからをみつゝも」歌は『古今和歌集』に「空蟬
はからをみつゝもなぐさめつ深草の山けぶりだにたて」(卷16・大系
本831番歌)、「をミなへしなまきたてる」歌は『夫木和歌抄』に

「家集、蟬を 俊頼朝臣」として「女郎花なまめきたてるすがたを
やうつくしよしとせみの鳴くらん」(新編第2巻・3576番歌)とあ
る。清逸本は後者「なまめきたてる」の「め」の字を脱する。

⑨ うづらなす
万葉集によめり 鶉の如くといふ也 いはひもとほりとつゝ、
けれハ枕詞也 狩場にて土につらをつき入てかくれふす鳥也

といへり

—「万葉集」に「かけまくも ゆゆしきかも…大殿を ふり放け見
つつ 鶉なす い匍ひもとほり(下略)」(卷2・大系本199番歌)
とある。

⑩ うつぶるひ

海苔の名にいへり 紫菜の類にて海中に苔を採て露を打ふる
ひそのま、乾て用るをもて名くといへり さて出雲楯縫郡の
嶋の名十六嶋をよめるハ此苔の出る所なるをもて也

—「大和本草」「紫菜」(アマノリ)の条に「…武州ノ浅草ノリ品川苔
下総ノ葛西ノリ雲州ノ十六島モ皆紫菜ノ類ナリ ウツフルヒトハ海
中ノ苔ヲトリ露ヲ打フルヒテホス故ニ名ツクト云 コノ苔ノ名ニヨ
リテ其島ノ名ヲモウツフルヒト云(下略)」(卷8・40オウウ)とある。

⑪ うつしおミ

古事記に見ゆ 顯大身の義也
—「古事記」下巻に「恐し、我が大神、宇都志意美有らむとは、宇よ
り下の五字は音を以るよ。覚らざりき。」(大系本三二七頁)とある。

⑫ うなハ

鶉をつかふ繩也 濃州藤川の漁者の精巧なる者一挙十四隻に
及ふあり 手の隙なし 舟もまた十四艘つゝ、にて毎夜年魚を
とれり

⑬ うべこなバ

万葉集に見ゆ 諸児汝者の義也といへり

—『万葉集』に「諸兒うぶこなは吾わがに恋こふなも立たと月づの流ながなへ行いけば恋こしかるなも」(卷14・大系本3476番歌)とある。清逸本の「うべこなバ」は「うべこなハ」の方がよからう。土清使用の寛永本も「宇倍兒奈波ウベコナハ」とある。

⑭ うよ

他の飢ヒドに及んとするを口語にうよといふハわゐるうゑおにて用らく詞なれハお転してよとなるなり

—整版本『和訓栞』に見出し「うよ」はある(前編。卷4・28ウ)が、右解説文を削除する。なお余計ながら「用らく」は「はたらく」と読む。

⑮ うろたえる

狼狼の意 胡乱に絶たるの義なるへし ○うろつくも同じ
うろくともいふ

【衣の部】—八例

① えうさや

栄西建仁寺を建立の時上梁の日に臨ミ大材あがらざるをもて人夫に我名を呼よびて引しめたり その俗伝也

—『諺草』「栄西エウサイ」の条に「俗に伝ふ。建仁寺の栄西。…同建仁二年六月。建仁寺を立て禅宗を弘めんとす。上梁の日に臨て。大なる材木上らさりければ。此僧。人夫に下知して。我名を呼よびて引

あくへしと云ければ。虹梁故なく引上たり。これよりおもきものを

引時。あゝいさいくと唱ふる詞始る。(以下割注)此説。元亨釈書にのせず。其外の書紀にも見えすと云共。俗伝如此イハレ」(卷5・36ウ)37オとある。『塩尻』も同様の記事(卷88・栄西)を載せるが、後半の割注を欠く。

② えうれいぼし

悪星也 太平記に天王寺の妖霊星を見ばやと謡ひけると見えたり 儒生藤原仲範曰妖霊星あらはるれハ国必ず乱ると記せり

—『太平記』卷五「相模入道弄田楽并闘犬事」に見える。

③ えせび

漳州府志の玉屑簪也といへり

—「えせび」は馬酔木の伊勢の方言(本草綱目啓蒙)。「広和本草」「玉屑簪」の条に「和名馬酔木 一名鎮番花 漳州府志二見ヘタリ(下略)」(卷6・7オ)とある。

④ えなが

鳥の尾の長けれハ名くるにや 背ハ鶯に似て四十からより小也 声よしといへり

—『大和本草』「エナガ」の条に「頭上白クムネハラモ白シ 背短ク尾長シ 背ノ色ウクヒスニ似タリ 四十カラヨリ小也 声ヨシ」(卷15・19ウ)とある。

⑤ えのきぐさ

信州にあり 田麻也といへり 山城にては鬼針草をいへり

—『広大和本草 別録』「田麻」の条に「和名エノキ草…本草草部有

名 未用 頌説信州田野及溝澗ニ生スルト云モノナリ」(上巻・21才

ウ)とある。

⑥ えびすめ

倭名鈔に昆布を訓せり 唐書に南海の昆布といへる意也

⑦ えま

姓に江間あり 又江馬とす 江馬小四郎ハ北條義時也

— 整版本『和訓栞』に見出し「えま」はある(前編。巻5・7才)が、

右解説文を削除する。

⑧ えんおん

宴穩と書り 釈奠別所也 宴穩故曰穩座 座ハ興宴を設る

の座也 穩座ハ江次第に非ニ嚴重威儀座 自他舒見ゆ

—「と見ゆ」の「と」を脱するか。

【乎の部】— 十例

① をかん

悪寒と書り にくむの時漢音を也 呉音ウの音也

② をざし

倭名鈔に鰈をよめり 魚指成へし 唐韻に以竹貫魚と見え

たり 今白魚の目指貫るものをめざしといへるも此類也

—『和漢三才図会』「鰈(めさし)の条に「…△按白魚水魚等十頭相

連為鰈」(巻51・魚類)とある。

③ をとこぬ

男居と書り 物侍の部屋也

④ をどもり

俗語也 小よどもりにてもり反み也

⑤ をにつくひと

従者をいふ 西土にも尾字を用たり

⑥ をぬ

万葉に見ゆ

— 整版本『和訓栞』に見出し「をぬ」はある(前編。巻5・16才)が、

右解説文を削除する。

⑦ をばな

茅花をいふ 万葉集に麻花と書せり 穂に出しか麻の乱れた

るに似たる也 緒花も同じ 源氏にまたほに出さしたるも露

をつらぬきとむる玉のをはかなけにうちなひき又をはなのも

とよりことに手をさし出してまねくかをかしょう見ゆるにと書

り また多く尾花と書り 獣の尾に似たるとにや 神功紀に

はたす、きほに出し吾ハ尾田のあたぶし云云と見えたれば掬

もありし さてほに出るといふ事も此本文そ始めなりける

○をばなか袖 をばなの波は見たてたる也 なミよるとよめ

るハ一かたへ靡き寄也 ○鷹の身なし羽とて腹にある毛をも
いへり

―『源氏物語』引用文(宿木)は「かれくなる前裁の中に、尾花の、
物より殊に、手をさし出て招くが、をかしう見ゆるに、まだ、穂に
出でさしたるも、露を貫きとむる玉の緒、はかなげにうち靡きたる

など、れいの事なれど、夕風、猶、あはれなりかし。」(大系本五・一
○三頁)とある。大系本・全集本に異同が存しないことからすると、
何がしかの理由により本文に乱れが生じたものと思われる。

また引用の「神功紀」は『日本書紀』巻九に「幡荻穂に出し吾や、
尾田の吾田節の」(大系本上・三三二頁)とある。少なくとも清逸本の
「あたぶし」は「あがたぶし」の脱と判断できよう。

なお『和訓栞』は鷹に関しその多くを『定家卿鷹三百首注』より
採用する(拙著『鷹詞より見たる『和訓栞』の研究』が、右も同書『尾
花とは身なし羽とて腹に有毛を云也』(44番歌注)に基づく。

⑧ をりない

関東の俗語にいへり 御座らぬといふ意也 されハをりハ坐
の字の訓なるへし

⑨ をろく

をハ小の義にや

―『書言字考節用集』に「下路々々(ラロく)俗字(言辭・八上)と
ある。

⑩ をわう

雄黄也 共に呉音也 雄徳山 素箋雄も亦同し

【加の部】―十八例

① かくこのもの

平家物語に見ゆ 恪勤者の義也

―『平家物語』巻一「俊寛沙汰 鶴川軍」に「健兒童もしは恪勤者な
どにて召つかはれけるが」(大系本上・一二六頁)とある。『書言字考
節用集』は「恪勤(カクコ)言辭・八上)につくる。

② かさむ

水などにいへり かさなると意同し 又盛衰記に義経の事を
いひて頼朝にかさみて見ゆといへるハ笠より出たるにや ○
鷹の高き所へ上るをいへり ○かさどるといふ詞もかよへ
り

―『源平盛衰記』巻四十六「頼朝義経中違」に「平家ヲ誅罰シテ。天
下ヲ鎮タルハ。神妙ナレ共。頼朝ニカサミテ見ユ。」(慶長古活字本・
10オ)とある。

また『大諸礼集』巻十四「三議一統」の「第七 奏対門」に「
鷹詞の事。…かさむとハ高き所へ鷹の上るをいふ也」(26オ〜28オ)
とある。

③ かざる

賁をよめり 音ひ也

④ かじきどほし

魚の名也 やがらに似たり かじきハ船のかじきなるべし

— 『和漢三才図会』「鱒」の条に「俗云加知止乎之…△按鱒嘴尖利如鉄 海船値之則可突拔 故俗呼名「舵通」(卷51・魚類)とある。

なお『本草綱目啓蒙』「鱒魚」の条には「…カヂドラシニ充ル説ハ非ナリ カヂドラシハ一名カヂキドラシ ケンウヲ(下略)」(卷40・44ウ〜45オ)とある。

⑤ かちき

塩敷樹をいふ 勝軍木によれる也 ふしのきともいへり

— 『大和本草』「五倍子」(フシ)の条に「塩麩子(ヌルテ)・塩膚子(卷11・4オ)を掲げ、『本草綱目啓蒙』「塩麩子」の条に「フシノキノミフシノキ…カツキ カツキ カツノキ奥州 カチノキ 勝軍木…塩敷樹小鹽(下略)」(卷28・7ウ〜8ウ)を載せる。

⑥ がづく

俗語也 嗟嘆野物語に事をがづきてとも事をがづきけるにやとも見えたり 探をかづくるとよみし意なるにや 今かぎつくとといふにもかよひたる詞也

⑦ かなやま

銅山をいふ 金山銀山も本一也 されと銅山金山銀山分てり夜光り物の如く見ゆるハ佐渡の金山に度々あり 夜知金銀氣

と詩にもいへり 昼光るハ銅山也 ○かなやまいしハ礪石也

— 『礪』は「礪」と同義(『名義抄』僧上二二五に「アラカネ」)。「和漢三才図会」「銅」の条に「銅礪ハ 銅初付ハ石礪也。紫光色者名「紅鉛」(下略)」(卷59・金類)とあり、また『雑字類編』に「△銅礪石」(卷2・27オ)とある。

⑧ かながさぎ

金が崎の城ハ越前国也

⑨ かハシ

肥後の郡名合志をよめり

— 『倭名鈔』「肥後国」に「合志(カハシ) 加波志」(寛文十一年付訓本。卷5・13ウ)とある。なお『倭名鈔』寛文十一年本の使用については「けむし」の項を参照されたい。

⑩ かぶつ

侍中群要に下物と書り 大盤之特從御厨子持来菜名也

— 『侍中群要』第五に「下物 大盤之時從御厨子所持来菜名也(割注)」(続々群書類従7)とある。清逸本「大盤之特」では文意が通らない。

⑪ かふか

近江の郡名甲賀を天武紀に鹿深と書り

— 『日本書紀』卷二十八「天武紀」(上 元年六月)に「高市皇子、鹿深カフカより越えて遇へり。」(大系本下・三八八頁)とある。

⑫ かミシマ

万葉集に備後国神嶋浜と見ゆ 神名式に備中国小田郡神嶋神
社 統拾遺集建久九年大嘗会主基方屏風に備中国神嶋有_三神
祠_三所と見ゆ 西国にある歟

—『万葉集』卷十三「玉_{たま}梓の 道に出で立ち あしひきの 野_の行き山
行き云々」(大系本3339番歌)の詞書に「備後国神島の浜にて云々」、

『統拾遺和歌集』卷十「神しまの浪の白ゆふかけまくもかしこき御
世のためしとぞみる」(新編第1巻759番歌)の詞書に「建久九年

大嘗会主基方御屏風に、備中国神島有神祠所を」とある。

⑬ かんつまります

統日本紀の宣命に神積と見ゆ されバ神留坐もかんつまりと
訓へし 却崇神祝詞に高天原尔神留坐_三事始給志神漏伎云云
と有をと、まりと訓してハかなはず つまりハあつまりの略
也 多くの皇祖神たちの集てこと定め給へる命といふにて理
明らかに言雅也 神留の字ハ崇め辞にてかんと唱ふ 万葉集
に可武佐備以万須とあり つまりにつもりの借ハ古の常也と
いへり

—別に「かみつまり」(整版本「かむつまり」)の項有り。

⑭ からり

保元物語に矢のかぶとに当る音にいへり 俗にかを濁りても
いへり

—古活字版『保元物語』卷中「白河殿攻め落す事」に「能_よ引て放つ矢

が、御曹司の半頭_{はつが}にからりと当(つ)て、甲のしころに射つけたり。」
(大系本二六三頁下段)とある。

⑮ からそぎ

葉も花も藪でまりに似て赤実房をなせり

⑯ からめる

搦_し字を訓り 生縛_{いせと}の義に用ひ来る事久し 追手搦手なともい
へり からめ取を捉搦 捕搦なともいへり

—別に「からむ」「からめて」の項有り。

⑰ からひつ

唐櫃と書り 類聚雜要に香唐櫃見ゆ

⑱ かるや

狩矢也 あらちをのかるや 人心かるやなどよめり 又輕太
子の作り給ふを輕箭と名くる事古事記に見えたり
—「あらちをのかるや」歌は『拾遺和歌集』に「あらち男_{おと}の狩_かる矢_や
前_{まへ}に立_{たつ}鹿_{しか}もいと我_{わが}許_{かり}物は思_{おも}はじ」(卷15・新体系本954番歌)と
ある。

また『古事記』下卷「爾に輕_{かろ}太子畏_{おそ}みて、大前_{おほまへ}小前_{こまへ}宿禰_{すくね}の大臣_{おほおみ}の
家に逃_{にげ}入りて、兵器_{つはもの}を備_つへ作りたまひき。」の注に「爾の時に作り
たまひし矢は、其の箭の内を銅にせり。故、其の矢を号けて輕箭と
謂_{いわ}ふ。」(大系本二九三頁)とある。

【幾の部】—二十六例

① きあひ

俗語也 気合の義成へし

② きうま

刑具にハ訓を用う 錦織万花谷に木驢と見ゆ 習騎にハ音を用う 通典に見えて唐の制也 ○神馬に木馬を用る事朱子語類に見えて御馬といへり

③ きかく

人のきかくにと哥によめるハ聞の義也 かく反くなれハ延て調をたすの語也 よて万葉集に直に聞の字を填たり

—『万葉集』に「夕さらず河蝦かはづ鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくしよしも(聞師吉毛)」(卷10・大系本2222番歌)とある。

④ きくぎ

倭名鈔に栓をよめり 木釘也と註せり 今音をよびてせんといへり

—『東雅』「栓」の条に「倭名鈔に四声字苑を引て栓はキクキ 木釘也と注せり 今俗にセンといふは字の音を呼ぶ也」(卷9・器用第9)とある。

⑤ きくまくら

遵生八牋に菊花と見え本草に菊花作枕明目と見えたり 歌の題に菊花薰枕などもいへり

⑥ きくなへに

古今集に見ゆ 聞からの義也

—『古今和歌集』に確認できないが、『新統古今和歌集』ならば「なが月の つきのさかりに……これやむかしのことのはに 残れるみちときくなへに 袖のみぬれて みしま江の(下略)」(新編第1巻・2043番歌)とある。

⑦ きこ

わらひの根にて取たる粉なり 其からにて繩ぬひてわらびなハといへり 生粉の義 糊とす 又其粉を饊にしたるをわらびもちといふ 本草に取粉作二粗粒一と見えたり ○木子の大工の事ハ挨囊抄に見えたり 説あやしむへし 御湯殿記に木子てうの始の事と見えたり

—『和漢三才図会』「蕨菜」(わらび)の条に「……△按蕨(中略)掘取其根ヲ搗爛去ニ麤皮ヲ用ニ肌皮ヲ作レ繩ニ謂ニ之ヲ蕨繩ト 数年中ニ雨水ニ而不朽也 其粗粒用ニ中心白粉ヲ如レ法製レ之 如ニ葛餅ニ而紫色 用ニ沙糖豆粉ヲ和レ之食 甚美 或用ニ織帛家及紙工家之粘ヲ(下略)」(卷102・柔滑菜)とある。

なお清逸本に「挨囊抄」とあるが、『和訓栞』は「塵添挨囊抄」を典拠とする。同書第三三話に「木子の大工の事」(巻5・16ウ)と題してこれを収めるが、『挨囊抄』にも同話(巻3・12ウ)は見える。

⑧ きこえ

何々のきこえありといふハ論語 聞達の聞字の義也 よて神

代紀に達字を読み、源氏物語に何にてもいひたることを聞えたるきこゆるなどいへり。万葉集同し。神代紀に知聞をきこえしむとよめり。

―『日本書紀』卷二「神代紀下」に「天稚彦が妻下照姫、哭き泣ち悲哀びて、声天に達ゆ。」(大系本上・一三六頁)、同書同卷に「…故、状を告して知聞えしむ」とまうす(大系本上・一五八頁)とある。

⑨ きざりもち

神代紀に持傾頭二者をよめり。死者の傾頭を持って扶くる意なれハ氣去を持の義成へし。一説にくひ反きすわ反さにて頭居る持といふにや。送葬に死者の頭を持具あるなるへし。

―『日本書紀』卷二「神代紀下」に「即ち川鴈を以て、持傾頭者及び持帚者とし、」(大系本上・一三六頁)とある。

⑩ きじやう

俗にいふハ氣丈と書り。氣機丈夫の省略にや。

⑪ きす

蚶也。哥にきすかく海人などよめり。○魚にきすあり。白鱈魚也といへり。細小なるをもて諺に瘦ぎすなどいへり。きすこともいふ。虎文あるを虎きすこともいふ。又穴ぎすあり。鱉魚也といへり。川ぎすハ黄鱈魚也。紀州にてだうほうといふ。

―『藏玉和歌集』に「きすかく海士」を載せ、「きすかく」に「貝の名

也。かくとハすなこをかきのけてとるを云也(割注)とある。

また「大和本草」「キスゴ」の条に「…○虎キスコ 関東ニアリキスゴニ似テ虎ノ文アリ(下略)」(卷13・37ウ)、「広和本草」「白鱈魚」の条に「和名キス」(卷8・17オ)、同書「黄鱈魚」の条に「…黄鱈魚ハギ、黄鱈魚ハカハギス 賀州ニテグズト云モノナリ(下略)」(卷8・4オウウ)、「物類称呼」「幾須古」の条に「きすご…紀州にてだうほうと云(卷2・11オ)とある。

⑫ ぎぜつ

父子義絶などいふ事東鑑に見えたり。

―「義絶」は親子の縁を断つこと。「父子義絶」としては確認できないが、「東鑑」文治二年六月十五日の条に「為安楽寺別当濫望。背二氏挙。依越大衆。義絶事。右背父命者。非子道。」(寛永三年本)とある。

⑬ きたはし

階をいふ。段橋の義也。

―別に「きざハシ」の項有り。「日本釈名」上卷「段(キタハシ)の条に「きだハ段也。段々ありてのぼるはし也。又きざはしとも云。段々きざみあるはし也」(宮室4・29オ)とある。

⑭ きぢ

杯僕をいふ。木地の義也。○きぢやハ日本寄語に捲胎匠と見えたり。

—「杯僕」未詳。「捲胎匠」も「日本寄語」に確認できない。

⑮ きちん

黄色をいふは麴塵の音なるへしと云り ○旅宿にいふハ木賃と書り たきゞの賃也 又夜具の著賃のミを出してやとるをいふ也

—「東雅」「麴」(カムダチ)の条に「麴塵といふ色は黄なるをいふ也

今のごときは麴をはカウヂといひ麴塵をはキチンといふ也」(卷

12・飲食第12)、「日本釈名」下巻「麴塵」(コウヂ)の条に「きくちん

を転じてこうぢといへるにや きとこと通ず 又黄色をきちんと云

きくちんを略せり こうぢの色也」(飲食18・22ウ)とある。

⑯ きつし

嚴酷の意にいへり 豊後詞にぎうなといふ

—「書言字考節用集」に「酷(キブシ・キツシ) 人性ニ所言」(言辭・

九下)とある。

⑰ きつと

急と屹となど書り とハてには字也 されと撰集抄にきとある人宇治拾遺にきとまわれと(きと) 目ミいれなと見えたれハ和語なるへし 牙の義にや

—「宇治拾遺物語」に「きとまわれと目ミいれなと」は確認できない

が、「きと参れ」と、召につかはしたりければ「一八四段」、「きと、

目見いれ奉るによりて」(九段。以上、大系本)はある。後半「きと」

の省略と見做し括弧を付して補った。

⑱ きつかけ

雲図抄に切懸と書り 俗にいふは斬懸の切成へし

⑲ きとり

木鳥の義 鷹に逐れて木にあかる鳥をいへり 木に居ハとり得ず

—例えば「西園寺鷹百首注」に「木鳥とハいたく鷹にをはれて又かり

人もこゑしけくをふによりてせんかたもなくて木にあかる鳥也 木

に居ならひてハ鷹常にとらさる也」(48番歌注)とある。

⑳ きぬた

倭名鈔に砧をきぬいたとよめり 衣板の義也 うつきぬたと

ハよし きぬたうつとハあし、といへり 新撰字鏡にハ砧を

かなしきの石とよめり 礪も同し ○青磁の上品にきぬたの

名あり 形をもていへり ○抄に又砧をよめり 展繪石也

と註せり ○古詩歌砧多く詠せし 今ハしからず 古賤民ハ

麻布のミ着し秋涼に布をねもころに打て綿を衣服せし故に砧

の聲繁かりぬへし 今ハ木綿の実を伝へわたを衣にすれハ賤

山がつの衣うつわさも絶にき

㉑ きのぼり

徒然草に見ゆ 文選の都廬を訓すへし

—「和訓栞」中編「てらつ、きまひ」の項に「文選にて都廬をよめり

都盧八国の名 合浦の南にあり 此国人高き木に登る事てらつ、きの如しと よて都盧尋樟と見ゆ 尋樟をはたほこにのぼるとよめり」
〔卷15・29才〕とある。何れも文選「西京賦」〔卷2〕に基づく記事であるが、編者土清はともかくとしても、本項の「文選の都盧を訓すへし」では説明不足の感を免れ得ない。

②② きのねのたち

大殿祭ホカヒに木根乃立知と見ゆなり くひをいふなるへし

―『延喜式祝詞』卷八「大殿祭」に「事問之磐根木能立知」〔大系本四一六頁〕とあるが、明暦三年本は「事問之磐根木根乃立知」とある。青木紀元氏が「版本の卷第八祝詞は、…過誤の増した本である」〔祝詞全評釈〕と言われるように、明暦三年本の「木根」の「根」は衍である。土清使用のテキストが整版本であることが知れる。

②③ きハ

万葉集に見ゆ 際をいふ 究と意通す 源氏にきハにはあらぬと見えたり 其分際をいふなり 八月十五夜に俊平

秋ハまた過にしはかりあるものを今夜の月をきハと見る哉
―『万葉集』「天地を照らす日月の極キハ無くあるべきものを何をか思はむ」〔卷20・大系本4486番歌〕を指すか。

また「秋ハまた」歌は『玄玄集』に詞書「俊平一首加賀守 八月十五夜」として「あきはまだすぎにしばかりあるものをこよひの月をきはと見るかな」〔新編第2巻・157番歌〕とある。

②④ きみとひと

人ハ臣をいふ おみといふに同し

②⑤ きんみつだ

金蜜陀と書り ○銀蜜陀あり 小田原城西に出る

―『用業須知』「蜜陀僧」の条に「薬店ニ有金銀二種」 銀蜜陀ハ真ナリ 金蜜陀ハ他物ナリ 不可用〔卷4・1ウ〕とある。『物類品隲』はこれを引く。

②⑥ きやうじこぢ

香匙火筋の音也といへり きやうハ香の漢音 こハ火の唐音也

―例えば『黒本本節用集』に「香匙火筋〔キヤウジコジ〕」とある。

【久の部】―十例

① くゞ

倭名鈔に莎草をよめり 今もくゞと称する物あり 俗にくゞともいふ そをもて席とし繩とし馬具とす 又陣中飯の苞ツトとす 莎草と一類別種也といへり ○牛くゞあり 大也とそはまくゞハ磚子苗也といへり 又狗背をも三稜をいへり 新撰字鏡に苜を訓せり ○万葉集に潜をくゞとよめり くゞの略也

―『大和本草』「クゞ」の条に「…織テ短席トス 農人コレヲ以馬具トシ又繩トス 武人はヲ用テ陣中ニ飯ヲ包ム苞ツトトス 槌ニテウツヘ

シ 又牛ク、アリ 相似テ大ナリ 其用小ナルニヲトル 順倭名抄ニ莎草ノ和名ヲククト訓ス 莎草ハ香付子ナリ 是ト一類別物ナリ 又昔モ一類ナリ(卷8・37オウ)とある。

また「廣大和本草」「三稜」の条に「和名ク、一名ミクリトモ云(下略)」(卷3・12オ)、同書「蔦蕉」の条に「和名ク、瞿仙山居録ニ見ヘタリ 実ハ狗背ノ類ナリ」(卷4・8ウ)、「用藥須知」「三稜」の条に「……磚子苗(ハマクミ)ハ其種類ニシテ不入_レ藥用」(下略)」(卷2・1ウ、2オ)とある。

② くこ

枸杞の俗音なるよし倭名鈔に見えたり 葉も実も円か也 朝鮮ぐこハ葉も実も長し 刺なきもの真也 刺あるものを天草ぐこと呼り 阿蘭陀とも云 実長し 枸棘是也といへり ○倭名鈔に箆篋 俗にいふくこと見えたり 今ぐとと呼り 風俗通に箆篋に作る 法花経にも見ゆ

―「用藥須知」「枸杞」の条に「和有_二種_一 無_レ刺_ノ真ナリ 有_レ刺モノヲ。阿蘭陀グコト云 又天草グコト呼フ 此本草ニ所謂_レ枸棘ナリ 性劣レリ」(卷3・5オ)とある。

③ くしわぎ

新撰字鏡に鏡又釵をよめり 鏡を鉤也と註せり 玉篇に鉤逆鉞と見ゆ 釵ハ考得す

④ くすしはひじり

祝詞に天津奇護言 古語云久須志伊波比許登と見えたり くすしハ褒る辞 いはひは斎_{イミ}にて凶を忌 吉を用る故に護言と書り

―「延喜式祝詞」卷八「大殿祭」に「天津奇護言 平古語云久須志伊波比許登」(明暦三年本)とある。

⑤ くぢき

折傷をいふ 文選に折をくちくとよめり

―見出し「くぢき」とともに全文を朱筆にて抹消する。なお「書言字考節用集」に「折傷(クジキ)」(支体・五)とある。

⑥ くつたく

口語にいへり 屈滞の訛成へし

⑦ ぐづく

俗語也 愚図の音成へし 図ハはかりこと也 ぐづらぐづく ぐづかハなともいへり ○物を煮るにぐづくにへるといふ 周礼に肉湊_{キウス}と見ゆ 字書に肉在_二鑊中_一而泣肉中有_二液汁_一 故从肉 ○从泣とあり

⑧ ぐどく

愚鈍の義なるへし

―「書言字考節用集」に「愚鈍々々(グドク) 俗語(言辭・八下)とある。

⑨ くるみ

胡桃をいふ 古語拾遺に見ゆ 新撰字鏡に栲をよめり 又古
斯を訓せるはいふかし 呉実クシの義也 続日本紀及古語拾遺に
呉桃と書り 古事記に胡床を呉床と書るか如し 胡を黒也と
もあれはくるはくろの転なるにやともいへり ○姫ぐるミあ
り 小にして形美ハシ 陰倉胡桃也 延喜式に見えたり 藻
塩草に

夏山にしけミかくれの姫くるミかけて見まくのかたき恋哉
殻の厚きを鬼ぐるミと呼り 本草にいふ山胡桃也 又朝鮮ぐ
るミあり 上品也といへり 唐くるみともいふ 又野ぐるミ
あり 兜櫛樹也といへり ○くるみ色の紙などいふハ表うす
香色にて裏のしろきをいふ也といへり 源氏にこまのくるみ
色の紙と見えたり くるミ染ハ今胡桃の青皮汁をもて染るを
いふ 新六帖に

うきふしをなけきくるみの染ほねハあまたつらさの数ぞか
さなる

― 例えば『大和本草』「胡桃」(クルミ)の条に「三種アリ 鬼クルミ
円ク皮厚クシテ堅ク破リカタクシテ肉スクナシ 本草ニコレヲ山胡
桃ト云… 鬼クルミハ形醜シ 姫クルミハ形美」(下略)〔卷10・23オ〕
とある。

なお『用薬須知』「胡桃」の条「和名朝鮮クルミ 是ヲ上トス 和
ノクルミハ山核桃ト名ク 俗ニ鬼クルミト呼フ… 又ヒメクルミア

リ 本草ニ云ヘル陳倉ノ胡桃是也(下略)〔卷3・7ウ〕に従えば、
本書「陰倉胡桃」は誤記ということになる。ちなみに「本草綱目啓
蒙」「胡桃」の条にも「…一種ヒメクルミ 一名メクルミ加州 核
薄シテ皺少ク中仁採リ易シ 集解出陳倉者薄皮多肌ト云者シテ陳
倉胡桃ト名クベシ(下略)〔卷26・31オウ〕とある。

⑩ くわんにふ
氷裂をいふ 氷紋とも見ゆ 火入乃音也といへり 天工開物
に古碎器日本国極珍重 真者不_レ惜千金と見えたり 碎磁も
同し

【計の部】― 十二例

① けいも

黄独をいへり 毛芋の義也 俗に是を何首烏と謬りよへり
○何首烏ハ別也

― 『大和本草』「黄独」(ケイモ)の条に「… 今案是世俗ニアヤマリテ
何首烏ト云モノナリ 畿内諸州多クウフ 若水曰是何首烏ニアラス
甘萐ナリ 今案中華ヨリ来ル何首烏ハ別ナリ」〔卷5・24ウ〕25オと
ある。

② けいざい

経済と書り 経によりて世を済ふ也

③ けうら

源氏に見ゆ きよらの転せる也と云り

—『源氏物語』の用例は夕霧・御法卷等に見える。

④ げぎこし

逆行の音也 建武年中行事に見ゆ

⑤ げゞしき

三儀一統にげゞしき馬といへり

—「三儀一統」は『大諸礼集』卷十三・十四の卷名。「三議一統」を正

式名とするが、『和訓栞』には「三儀一統」の例も散見する。卷十三

「第三 騎射門」に「一馬^{ばしやう}上の御弓を進る事。侍ハ馬のかしらより

弓のもととはづを進る也。け、しき馬ならばもつごとく渡す也」(65オ)

とある。

⑥ けでん

俗に物にけでんするといふハ化転の義成へし

—例えば『書言字考節用集』に「化転(ケデン)」(言辭・九上)とある。

⑦ けにこし

牽午子也 古今集に見ゆ 今あさがほといふ

—『花譜』下巻「槿花」(むくげ)の条に「千葉あり 単葉あり 共に紅

白あり さしてよく活く。…今世俗に朝かほといへるは牽午子也。

古今集にもけにこしとよめり(七月・4ウ)とある。

『本草和名』「牽午子」の条に「和名 阿佐加保」(卷11・47ウ)、『東

雅』「牽午子」の条に「アサガホ 倭名鈔に牽午子はアサガホといふ

と注せり」(卷15・草卉第15)とある。『古今和歌集』は物名に「けに

こし」と題して「うちつけにこしとや花の色をみんをくしら露のそ
むる許を」(卷10・大系本444番歌)とある。

⑧ けむし

尔雅ノ疏に毛虫と見えたり 雀甕ハけむしのす也 雀のたご

ともいへり ○倭名鈔に泉をよめり 毛の如きからむしの義

にや 麻无子名也と註す

—『東雅』「烏毛虫」の条に「カハムシ…即今俗にケムシといふもの

尔雅に…疏に此即毛虫とみえしものこれ也」、割注に「雀甕は俗に

スツメノタマゴともスツメノマクラなどもいふもの 通雅に雀甕は蝸

蝸房といひし即これなり」(卷20・虫多第20)とある。「スツメノタマ

ゴ」は清逸本の「すずめのたご」と異なるが、「すずめのたご」は「和

漢三才図会」他にも認められる。『東雅』の誤記と判断できよう。ち

なみに『和漢三才図会』は「雀甕 俗云雀乃太古」(卷52・卵生類)

とある。

この他、清逸本には『倭名鈔』の「泉」に対し「麻无子名也」を

記すが、上記注文は無訓本である元和三年版の「泉…属有子名也」

(卷14・13オ)とは一致しない。しかしこれは『和訓栞』典拠の『倭

名鈔』が二十巻付訓本(更に言えば寛文十一年本類)に基づく故のこ

とである(前掲拙著)。例えば寛文十一年付訓本は本書と同一の注文

「泉…麻無子名也」(卷14・15ウ)である。

⑨ けんびき

痲癬の訛音也といへり

—「諺草」「計」部末の「正譌」に「痲癬(ケンヘキ)けんびきと云ハ誤也。」(巻5・17ウ)、「合類節用集」に「痲癬(ケンベキ)痲ハ小腹ノ下ノ病也(割注)」「不仁(付病部・三)とある。

⑩ げんのしやうこ

現の証拠の義也 ○草にいふハ牛扁也 法花草ともいふ 花紫白二種あり ○花紫色のものを花肆に梅かえとも梅花草ともいふ 扁特也といへり

—「和訓栞」後編「たちまちぐさ」の項に「和名抄に牛扁を訓せり 本草にはざれども能痢を治すれば其薬功の忽なるをいふなるべし 今現の証拠といふ」(巻11・8オウ)とある。

また「本草和名」「牛扁」の条に「一名扁特」(巻11・45オ)、「大和本草」「牛扁」の条に「レンゲ草ト云…藻塩草ニタチマチ草ト訓ス 又俗ニゲンノセウコトモ云(下略)」「巻9・9ウ)とある。

⑪ けらつゝき

文選に都廬を訓せり 小鳥の名なり 倭名鈔にてらつゝきと見えたり 啄木也 今きつゝきといふ ○盛衰記に守屋けらつゝきとなりて天王寺の堂舎をつゝきし事見えたり 倭名鈔にてらつゝきの名によりて造言せる成へし

—「合類節用集」に「都廬(テラツ、キ・ケラツ、キ)文選」(禽鳥・五)、
『書言字考節用集』に「都廬鳥(テラツ、キ)」「(気形・五)とある。

また「東雅」巻十七「斲木」(テラツ、キ)の条に守屋の逸話(源平盛衰記) 巻十「守屋成」(啄木鳥)を載せる。

なお「和訓栞」中編「てらつゝきまひ」の項に「文選にて都廬をよめり云々」(巻15・29オ)の記事がある。↓「きのほり」。

⑫ けるふる

蛮名也 葉実胡荽に似たり

—「物類品隲」「ケルフル」の条に「葉胡荽葉ニ似テ小実 藁本茴香ニ類ス ○蛮種戊寅ノ歳種ヲ伝フ(下略)」「巻3・草部)とある。